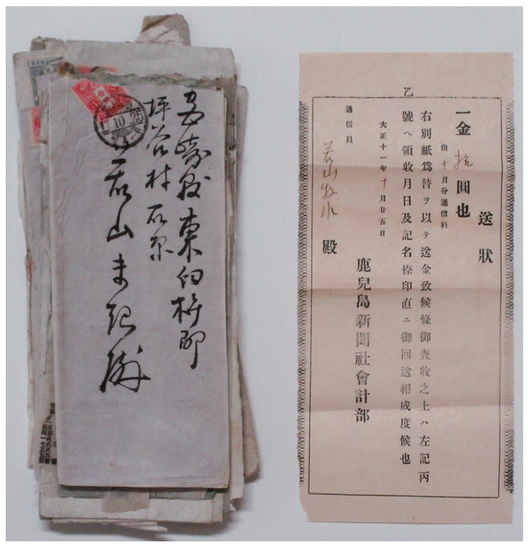
文学館だより

令和 8年10月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982－68－9511
文責 日高 第126号

収蔵資料から

其の117 選歌料領収証



母マキ宛の封筒

選歌料領収証

送り主は鹿児島新聞社（現南日本新聞社）、送り先は坪谷の若山マキです。大正10年～14年の日付のある封筒の中には、領収証が入っています。大正後期、牧水は鹿児島新聞の選歌を受け持っていました。この領収証は、新聞社を通じて謝金（一ヶ月十円）を故郷の母へ送っていたことを示しています。

このことについて、新聞社に勤めていた牧暁村（まきぎょうそん）が、『創作　若山牧水追悼号』にて次のように回想しています。

（略）牧水君が新聞の歌の選をしてくれるので、社からは簿謝を送つてゐた、その簿謝は牧水君の郷里なる日向の阿母さんの許に届けてゐたのである。（略）

参照／『創作　若山牧水追悼号』

牧水歌碑めぐり

其の118 牧水公園　うたの小径（こみち）



平成７年建立

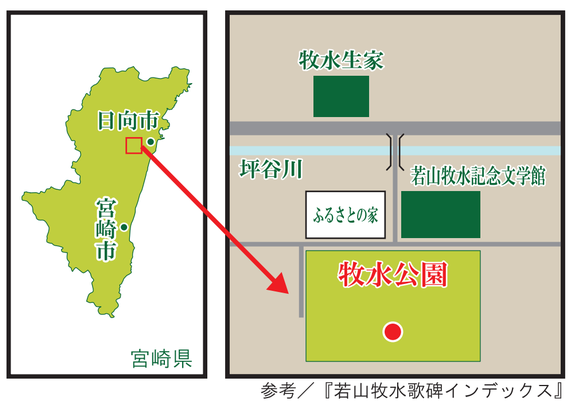
石こゆる
水のまろみを
眺めつつ
こころか奈（な）しも
秋の渓間に

牧水

大正６年、長雨が続いた後のある晴れた日、牧水は埼玉県飯能（はんのう）へ出かけます。周辺の渓の美しさと晴天に心動かされ、三日ほど秩父の渓や山を歩き、この歌のほか100首あまりを詠みます。

牧水公園には、うたの小径に沿って10基の歌碑が建てられています。牧水の愛したふるさとの風景を眺めながら、牧水短歌に親しむことができます。

（公園内には１１基）



参考／『若山牧水歌碑インデックス』

第76回牧水祭　晴天の下開催いたしました

今年も変わらず、牧水の命日９月17日(木)に牧水祭を開催することができました。150名に及ぶ参加者を数えました(スタッフ含む)。開会前には主催者による裏山歌碑献酒から始まり、日向市長、日向市教育長、若山家親族、宮崎大学教育学部中村教授、日向若山牧水顕彰会会長が生家裏山に上り、「ふるさとの尾鈴のやまのかなしさよ～」の刻まれている歌碑に献酒をしました。

そして、参加者が生家横牧水喜志子夫婦歌碑前に整列して、【第１部 歌碑祭】の開会です。坪谷在住岩下富男様による牧水短歌朗詠から始まり、東郷学園９年生の巫女２名による献酒、主催者、若山家親族、来賓、団体代表、地元代表と献酒が続きました。

ここからは場所をふるさとの家に移し、【第２部 牧水を偲ぶ会】と続きます。偲ぶ会では牧水の母校坪谷小学校閉校に伴い、日向市立東郷学園４年生が牧水の短歌朗詠・斉唱を披露してくださいました。元気あふれる堂々とした発表で、「上手だった。」「感動した。」「あの姿がいい。」との声を聞きました。主催者、来賓のあいさつの後は、我らが館長、伊藤一彦先生の講演『牧水のみち』です。メモを取りながら真剣に聴き入る参加者の姿が印象的でした。内容については後述します。

午後は約２時間、牧水が好きだった田舎料理を囲んでの懇談会です。昼食を取りながら酒を酌み交わしながら、牧水ファン伊藤先生ファンのみなさんの話は尽きません。牧水顕彰団体からは、みなかみ町牧水会田村会長、東京牧水会田原会長、若山牧水延岡顕彰会塩月理事から挨拶をいただき、ステージでは、ヒューガン・ボイセス（男性コーラス・アカペラグループ）による牧水の歌ほか坪谷小学校校歌を歌っていただきました。さらに、50年前に坪谷中学校に勤務されていたという方が、牧水かるた取りの始まりや牧水生家清掃、尾鈴山登山など当時を鮮明にお話しくださいました。

さて、ここで伊藤一彦先生の講話『牧水のみち』に戻りましょう。

まず、タイトル「みち」のひらがな表記に触れ、

牧水がこれまで歩んできた『道』
まだまだ分かっていない牧水の『未知』の部分

の二つを示唆している思いを伝えられました。

次に、牧水は牧水個人の力で生まれた訳ではなく、「みち」を準備した人がたくさんいる、その中でも水野栄吉が健海と出会わなければ、栄吉が健海を日向に連れてこなければ、牧水は生まれていないことに迫ります。他にも延岡時代、早稲田時代、その後出会った人が多くいることを強調されながら、「みち」を示す牧水短歌13首の解説へと続きました。













母の身ゆうまれいでにしたまゆらのわがけだかさを日のなかに見る　未刊歌編
われ生(あ)れしまへにありにしわれといふもののありせば日の光(かげ)に似む　未刊歌編
行き行くと冬日(ふゆび)の原にたちとまり耳をすませば日の光(ひかり)きこゆ　『くろ土』

伊藤先生はこの３首を引き、共通する「日」に着目。この「日」は、かつての自分の前世を現していると言います。詠まれた年代も異なる上に歌集未収録歌を拾う、この細やかさに気づきをもらいました。いつもそうですが、歌が詠まれた背景をもっと詳しく知りたいと今回も思いました。

牧水祭終了後、今年も顕彰会会員黒木直行さんが牧水祭壁新聞を届けてくださいました。みなさん、ぜひ見に来てください。（→右写真）



黒木直行さん制作
「牧水祭壁新聞」

新刊のご案内　　発送も承っております



伊藤一彦先生　第17歌集『歌の小舟』刊行　　短歌研究社発行

『歌の小舟』より

（略）本集の作品は八十歳の前後四年の作ということになる。七十五歳ですでに後期高齢者とよばれており、まぎれなく「老い」の歌である。（略）寿命があればもっと老いたい。短歌を杖として。（略）本集のタイトルを「歌の小舟」とした。広大な世界と日本の揺れ動く現実のなかで、また多彩な文学世界においても、五七五七七の形式の短歌は小舟である。しかし、千三百年のあいだ日本人が魂を乗せてきた不朽の舟である。（略）

今日会いし人の言の葉を籠（こ）むる小箱を輪が心（しん）にもつ
下り坂と思（も）ふ人多し一生が上りにて老いとふ上り坂
歌といふあの世とこの世出入りする小舟　運ぶは韻律の波



ヒュー！日向薬用植物研究会　『ひむか薬草ガイドブック』刊行

本書の特徴

若山牧水の短歌×身近な薬草　宮崎県日向市生まれの歌人・若山牧水の短歌に登場する植物を中心に、身近に息づく薬草160種を収録。植物の特徴・薬効・使い方を、短歌の情景と重ねて丁寧に解説しています。

ご注文、お待ちしております。

歌人井口寿則（いぐちとしのり）さん（宮崎市在住）　EテレNHK短歌「いちご摘み」出演

ご覧になりましたか。
9月20日放送のEテレNHK短歌「いちご摘み」のコーナーに宮崎市在住の若手歌人　井口寿則さんが出演されました。このコーナーは、前の人が詠んだ短歌から「一語」を摘んで、その「一語」を使って次の人が新しい短歌を詠み、次の人に繋いでいくというものです。現在活躍中の若手歌人が毎週、「一語」を摘んでいます。

前週の佐々木朔（ささきさく）さんの短歌

その街のはじまりの名はおしよせる潮のひびきのただそれだけの

を受けて、井口さんが一語を摘んだ短歌が次になります。

サーフィンにガチる未来もあるんかな、の五年目の街　登山もいいね

井口さんが読んだ「街」は、移り住んだ宮崎の街なのですね。

「いちご摘み」は伊藤一彦先生、久永草太さん、乃上あつこさんの『三世代のいちごつみ』で初めて知りました。家族や歌仲間で続けている方たちがいらっしゃるようですね。集まらなくてもグループラインひとつで手軽にできるところがいいですね。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

行き行くと冬日（ふゆび）の原にたちとまり耳をすませば日の光（ひかり）きこゆ

ゆきゆくと　ふゆびのはらに　たちとまり　みみをすませば　ひのひかりきこゆ

水源への憧れを強くもつ牧水は大正７年11月に利根川の水上を見る旅に出た。11月という遅い時期になったのは金策に時間がかかったためだ。しかし、そのために名歌も生まれた。20日間近くの旅である。この歌は湯檜曽から谷川温泉にむかう途中の一首。第三句は「たちどまり」ではなく「たち/とまり」の二つの行為の表現で、ゆっくり二音三音で読みたい。そして、眼目は「日の光きこゆ」。光を目で見るだけでなく、その音をしっかり聴いているのだ。牧水は聴覚のすぐれた人だった。幼少期から谷川の音を聴き、鳥の声に耳を澄ましてきた。桜の花の声も。そんな牧水ならではの聡耳（そうじ）の一首である。

参照『若山牧水全歌集』伊藤一彦編　引用『若山牧水の百首』

繁と水神様

牧水ゆかりの風景を紹介します

私は五歳くらいから歯を病んだ。（略）私の家から十丁ほど川上の方に柿の木淵という深い淵があった。（略）一方は高い岩の断崖となっており、その上の密林中に水神の社（やしろ）があった。母は私だけをひそかに起こして背負いながら幾日とか日をきめてそこへ丑の時詣（うしのときまい）りということをした。（略）小さな祠（ほこら）の前で初めて火を点じて灯明をあげ、落葉の積もった土の上に私をもひざまづかせ、彼女もそうして共に共に歯の痛まぬようにと祈願を籠（こ）めたものであった。　「母の事」（『おもひでの記』から）

生家前を流れる坪谷川の対岸に水神の祠があります。幼少期、虫歯に苦しむ繁は、母に連れられ水神詣りを繰り返しています。水神は水害から地域を守る神様として、多くは巨石が祀られました。ある水神の巨石が、実際に洪水大氾濫を「歯止め」したことから、転じて「歯痛止め」信仰が広まったとされます（諸説あり）。



親子が詣でた水神様（平成17年撮影）



地図：国土地理院ウェブサイト（https://maps.gsi.go.jp）

若山牧水記念文学館
〒883-0211　宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地



〈ホームページはこちらから〉

■利用案内■
【開館時間】９：００～１７：００（入館は１６：３０まで）
【休 館 日】月曜日（祝日は除く） 年末年始（１２月２９日～１月３日）
【入 館 料】小・中学生／１００円　高校生以上／３１０円（２０名以上は団体割引あり）
【お問合せ】TEL　0982-68-9511 FAX　0982-68-9512【公式ＨＰ】https://www.bokusui.jp